九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

デカルトの道徳説における「内的満足（喜び）」について

西本, 恵司
九州大学大学院 : 修士課程 : 倫理学

https://doi.org/10.15017/27544

出版情報：哲学論文集. 14, pp.74-79, 1978-09-20. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

発表要旨

デカルトの道徳説における「内的満足（喜び）」について

西本恵司

至福（béatitude）とはまずなによりも精神の満足（satisfaction d'esprit）そして喜び（plaisir ou joie）を伴なっていなければならないと、デカルトは考える[1]。そしてこの満足或は喜びは、徳（vertu）を実践することによって得られると彼は考える[2]。デカルトにとって徳とは「理性が勧告することはすべて、情念や欲求（passions et appétits）によってそらされることなく実行する、という強固で不変の決心を抱くこと」であり、「私はこのような決心の強固さ（fermeté）こそ徳とみなさるべきであると信ずる」と、彼は述べている[3]。

ところで、至福或は徳についてのこのような考えと、情念についての考えとは、相互にどのように関連し、秩序づけられるであろうか。デカルトは次の如く述べている。「情念は理性に従わせれば充分であり、また情念がこのように制御（apprivoiser）されると、ときとして（quelquefois）情念は過度（excès）に傾けば傾くほど益々有益なものとなる」と[4]。

情念が過度であることと、理性に従わせることとは一見合い反することのように思われる。だが両者が互いに対立することなく統一され、情念の有効性が取り出されるところに、デカルトの道徳思想の根幹があると考えられるのである。そして、我々がこの小論で取り扱おうとするのは、両者の統一を可能にする「内的満足（satisfaction intérieure）の思想である。この思想がデカルトの道徳説において有する意味を探究しようと思う。

さて、「内的満足」という表現は、「精神の満足」と同義ではあるが、至福との関連で度々使われている[5]。これに類似な表現として

は、「精神自身における満足」「精神の喜び」「内的証し」等の表現がみられる。[5] ここで我々は、「内的満足」という表現が用いられる典型的なコンテクストをクリスチーヌ宛書簡から引用しておこう。

「……自由意志（libre arbitre）は、我々をいわば神に似たものとし、神への従属から我々を免れさせると思われる結果、その善用こそ、我々のすべての善のうち最大のものですから、それ自体我々のうちにありうる最も貴いものでありますが、同時に、それは最も固有に我々のものであり、また我々にとって最も重要なものであり、我々の最大の満足は、ここからのみ由来しうることに私は注目いたします。従って、たとえば、善（le bien）を知るためにも、それを獲得するためにも、決して最善（mieux）をなすことを欠かさなかった人々が感じている精神の安らぎ（repos）と内的満足こそ、それ以外のところから生ずるあらゆる満足より、比較にならぬほど甘美で永続的でかつ強固であることは、周知のところです。[7]」

この書簡で、デカルトは自由意志が我々に固有に属する善であることから、その正当な行使である徳の実践のみが、精神の安らぎと「内的満足」との源であること、しかもそれは、比較にならぬほど「甘美で、永続的で、強固」なものであると語っている。[8]

このように語られる「内的満足」が、ではいかに理性と情念との統一を可能にするのであろうか。我々はまず「理性に従わせる」という内容を検討しておきたい。

至福を享受すること、そのことが問題なのである。そして、そのためには、いかなる真理を知れば徳の実践が容易になるのか、また欲望や情念を規制（régler）しうるのか。[9]「理性に従わせる」「理性の正当な行使」「理性による規制」等の表現[10]が意味するところは、まさにこのことに他ならない。

デカルトは四つの主要な真理を挙げている。[11] それらは、第一に、神が存在し、すべてが神に依存し、その完全性は無限であり、その命令は無謬であるということ。第二に、精神は身体よりもはるかに貴いということ。第三は、宇宙の広大な拡がりで、それは「無数の空しい不安と不満」を抱かないようにするためであった。第四は、個より全体の重視で、「常に自己一人の利益よりも自己の属する全体の利益を優先せねばならない」ということ。

これら四つの真理と道徳説との関連は、まず、神の完全性が摂理の問題として、欲望の規制に重要な視点と内容を提供しているし、精神の完全性は、先のクリスチーヌ宛書簡の引用からも明らかなように、自由意志の完全性として、généroslté の思想に、[12] ひいては、デカルトの道徳説の中核に位置づけられるべき重要さを有している。更に又、第四の真理である全体の優先は généroslté の思想に一つの

重要な視点を提供している。[13] 我々は、デカルトの道徳説が、これらの主要な形而上学的真理に基づいていることに注目せねばならない。

『情念論』では、道徳説が、欲望の規制と欲望を含むあらゆる情念に対する規制という問題[14]に関連させて導入されている。欲望の規制は、内容的には、第一第二の真理に基づいて説かれているのであるが、この欲望の規制にこそ、「道徳の主要な効用(utilité)がある[15]」と、述べられているほどである。だが、彼の道徳説が実質的に展開されるのは、欲望の規制に関する諸項に引き続く、欲望を含むあらゆる情念に対する規制に関する考察においてである。つまり「私はなおここに、諸情念に煩わされることを防ぐために大いに役立つと思われる考察を一つだけ付け加えよう」(art. 147) と。それが「内的満足」の思想である。『情念論』では「精神の内的情動(émotions intérieurs de l'âme)」と言われている。これに続く項(art. 148)で、この「内的情動」は、徳の実践のみに由来し、「この満足は、その人(徳を実践した人)を幸福にするきわめて強い力を持っているので、諸情念の最もはげしい力も彼の精神の平安(tranquillité)を乱すほどの力を決して持たないのである」と、言われる。つまり、「甘美で、永続的で、強固な」「内的情動(満足)」の〝感情〟こそが、我々を諸情念の主人たらしめ、そして諸情念を巧みに処理(ménager)し、諸情念のひき起こす悪(maux)をも充分耐えやすいものにしうると同時に、すべての悪からかえって喜びをひき出すことをも可能にするのである。[16]

我々は、「内的情動(満足)」の思想の導入によって、いわゆる情念についての論と、道徳説とが、巧みに統合されているのを見てとることができるであろう。[17]

ところで、我々はこの「内的満足」の思想と、先に挙げた第一と第二の真理との関係を別の角度から考察し、そこから、デカルトの道徳説の基本的性格を取り出したいと考える。

デカルトはこの「内的満足」の思想を、しばしば例をもって語っている。たとえば、先の art. 147 では、「妻を失なった夫」「読書」「観劇」の例がそれである。これらの例のうち、とりわけ「悲劇」(tragédie)の「観劇」の例は重要である。

この例において「精神の満足感」は次の如く語られる。つまり「精神は自らが諸情念の主人(maîtresse)でいる限り、たとえそれらがどのような性質の情念であれ、自己のうちに諸々の情念によって動かされるのを感ずるのが快よい(se plaire)のです[18]」と。つまりこの例は、徳を実践した人々の内的喜び(或は満足)の有様を具体的に知らしめる一つの例として出されているという点で、特に重要なのである。我々はここで、この例でもって語られる「内的満足」の思想が、一方で次の様な具体的な態度と結びついていることを見落す

わけにはゆかない。それは諸情念によって煩わされ、害されることのないようにするためとして、語られている。「それには一つしか打つ手（remède）がありません。それは想像と感覚とをそこからできるだけひき離し、慎重にかまえねばならないときには、それらを考察するのに悟性のみを用いるということです」[19]と。

さて、デカルトは「内的満足」は精神をして諸情念の主人たらしめると語る。[20]その意味するところは、いかなることであろうか。「諸々の情念によって動かされる」こと、それは我々が想像においてまた感覚において経験するところである。だがデカルトは徳の実践に由来する「内的満足」の〝感情〟を有する時には、「我々は様々な情念が我々の内でひき起こされる、そのことを感じて喜び（plaisir）を持つ」[21]と語っている。確かにこれはもはや諸情念をひき起こす様々な対象の如何が問われてはいないことを意味している。「想像と感覚とをできるだけひき離さ」ねばならないと言われるのも、この意味においてである。このように「観劇」の例が示すことは、あらゆる出来事、つまり諸情念をひき起こす様々な出来事を、あたかも劇中の出来事のごとくみなすという仕方で、[22]これら出来事の価値性が否定されているということである。それはまた、欲望の規制における、我々の自由意志にのみ由来する事柄と、そうでない事柄との区別とも、あい通じている。

価値性は我々の自由意志にのみ由来する。[23]つまり、価値性は実在性に基づいているのである。デカルトの用語では完全性である。デカルトは、喜び（或は幸福）が、「いかなる善つまりいかなる完全性に基づいているか[24]」を理性は吟味せねばならない、と言う。ところで、この理性の吟味は、疑いもなく「ある」と語られること、そしてその根拠（神の存在）へと我々を促す。それ故、この「内的満足」の思想は、存在論的な自己認識の問題を、その背景として有しているのである。

註

(1) à Élisabeth, 18 août 1645. 「実際、我々に善行をおこなわせることができるのは、自己の義務の認識であるとはいえ、もしそこにいかなる喜びももたらされなかったなら、やはりいかなる至福も享受することはできないだろう」とも述べている。

(2)
(3) à Élisabeth, 4 août 1645.

(4) à Élisabeth, 1er septembre 1645. また、エリザベトは、この箇所を引用しつつ、13 september 1645.のデカルト宛書簡で、諸情念の定義を要請し、これがデカルトを情念の検討に向かわせるきっかけとなっている。

(5) à Élisabeth, 4 août, 6 octobre 1645 novembre 1646.

à Christine, 20 novembre 1647.

(6) à Élisabeth, 18 août, 1er septembre, 1645.

(7) à Christine, 20 novembre 1647.

(8) 「内的満足」が永続的(durable)と言われており、この〝感情〟が、厳密に解された情念とは考えられていないことに注意せねばならない。注(17)参照。

(9) デカルトは、à Élisabeth, 4 août 1645.で、セネカの道徳説を検討しつつ、まさにこの点をこそ解明すべきであると述べている。

(10) à Élisabeth, 4 août, 1er septembre, 1645.

(11) à Élisabeth,15 septembre 1645.

(12) Passions. (1649) art. 152.「自由意志は、我々を我々の主人(maître)たらしめることにより、我々をある意味で神に似たものにする」と述べている。

(13) この第四番目の真理についてのデカルトとエリザベトとのやりとりから générosité という言葉自体が(但し形容詞形で)取り出されている。

(14) Passions. art. 144–6. と、art. 147.

(15) Passions. art. 144.

(16) Passions. art. 212.

(17) 筆者は、「内的情動」と「内的満足」とを同一の事柄とみなしている。また、この情動は、「それが精神自身によってのみひき起こされるという点で、精気のなんらかの運動に依存する情念とは異っている」とも、「この喜びはある知的な喜び(une joie intellectuelle)で、他のすべての情念からと同様、悲しみからも生まれる」と、言われている。(art. 147)つまり、この「内的情動」は、いわゆる情念とは異質の〝感情〟なのである。道徳説は、いわゆる情念とは異なる永続的な道徳的感情を前提とせねば不可能であろう。だが、それをも〝感情〟であるとして、「情念論」に「道徳説」を導入することができたと言えるであろう。

(18) à Élisabeth, 6 octobre 1645 また、エリザベト一家をみまう数々の不幸を念頭におきつつ、この例の有する意味を少し具体的に述べている箇所がある。そこでは、最も偉大な精神の人々は、運命がひき起こす様々の出来事を「劇」(comédie)の中での出来事のようにみなしているということ、そしてこのようにして、彼等はこれらの出来事を精神のうちに満足を持ってむかえている、と述べられている。cf. 16 août 1645.

(19) à Élisabeth, mai ou juin 1645. この書簡では、このような態度に続いて、「観劇」の例が提出されている。そして、「観劇」においては、

「想像が動かされるだけで、悟性は少しも関係ありません」とも語られている。Passions. art. 147. では、「観劇」は「……、一般にあらゆる情念を、我々の想像に与えられる対象の多様性に従って、我々の内にひき起こす」と述べている。

(20) 注(12)参照。générosité と共通の表現である。

(21) Passions. art. 147.

(22) 注(18)参照。

(23) Passions. art. 152, 153.

(24) à Élisabeth, 1er septempre 1645.

付記、昭和五十二年の九哲会秋季大会では、「デカルトにおける知性について――想像と関連させて――」という題目のもとに、知性と想像との関係を、第一第六省察を中心に知識論的に扱ったのであるが、小論は、その問題をより包括的な場で問題にするための段階的粗描である。

（本学大学院博士課程・倫理学）